

藩翰譜

二

和書門		
二	三	五
五	二	號
六	三	函
七	架	冊
九	冊	架

庫	文	閣	内
五	三	五	和
函	五	五	書
七	九	二	類
架	冊	號	

内閣文庫		
番號	和	23552
冊數		9(2)
函號	155	56



の系圖と云れは左衛門入道賢天五年卒す也時
二十七年七月廿七日に没す其子忠次は
又忠次は久保りて其子忠次は
子ありて忠次は久保りて其子忠次は
人ありて忠次は久保りて其子忠次は
を降る也忠次は久保りて其子忠次は
る一ハ系圖ありて其子忠次は
ま又忠次は久保りて其子忠次は
伯母尊也其子忠次は久保りて其子忠次は
後忠次は久保りて其子忠次は
一永禄六年の秋より一向寺の門徒者ことくくむす
弟トせし時忠次り向ふ不やめしはとりあるはし
つ忠次り傳と七年六月今川の侍大將小系肥前守吉田の
合せ考ふへし

城より忠次先陣を承て攻む小系防ぎ兼て忠次は依り
て一一族一人を殺て駿河に水信仕りゆらん其城を
八開き海へまきま定りしれハ忠次り娘をも副て小系は後
は小系駿河は向りぬれハ三河を悉く徳川及に隨ひぬ日
き月二十二日城をハ忠次を揚りりる源三郎及ハ久松
旧母の市才母後武田り今川と亡はせし時おのり人元
を降りて忠次は久保りて其子忠次は
を降る也忠次は久保りて其子忠次は
て不の合我は先陣一度も不足の名と云はれ
只大略を記し中にも元龜元年九月去ぬる六月道
江のふ姉川の合我の後織田及又加勢の事を信りぬハ此
なハ忠次石川日向守家成と在り宗徒の人と引りしと向

ふそ勢よりりみ二子人よハるは進江の勢回あり織田及
又兼り色子信長収ひり少く斜なりは織田の切さきとハ
信長防ぎ致ひぬん南ふ依り木り軍勢又ハ人々向りて軍
せよと宣へハ勢回と津津のるより陣ありける日共二十
又日依り木り多勢と致し一日のるに二十勝ヶ度切さ
き悉く利を失つて致前の兵争かられしは信長の中より
しそ切必りしはゆりはれ日共二年四月武田右膳大夫入
乃信玄二万三千人を引率し三河の西へ後向は徳川及敵
二連木の城攻るとすし食ひ勢尽り五子人後ろ巻せんと
て出ありは城ハ危ぬとすへしハ在田の城より入あり武
田も家より押寄て山々を陣を築る是子是の四節勝頼山縣
三節兵備昌景於合を勢八子五百城の内せり又攻進はく

左邊の尉忠次城申より切て出て切さき此多勢を退拂ひ
明日又先搦して在田の幕のありしめて一日りそるに
三度とこれ致したれ忠次城日自り二度又廣津に在り武田入
乃徳川及此城よりましましと足てはれハたやすくハ成さ
れしとこより山路より搦りて切必へはゆりける日三
年十二月三方ヶ原合戦に武田の侍大將小山田信守守り
陣を打破る天正元年二月忠次鳳来寺の城を攻るは六呈
一云の城よりくすしそ皆降人と成て出り日二年九月
武田四節勝頼淡松の城を攻るとし二万降参と志しり人
て大天竺を打海り水方ハ入りし七子人まで小天竺と
折望し既に水勢を進めらる忠次志きりし謀めはれハ水
方すくみて致し及るは加さきも折て引返る日共十月

陳より火を放ち時を俵より切て入るかめきさるんて攻
一福に多摩女伝実を初めとし宇佐の大將多く討つ奥平
九八郎伝昌も同じく時を合せり、城の中より切て出り小
山田宝賀相木ら勢おのつ陳より火を擡て煙りの物れは
所好を造詣く討つるは小山田ら五石降人あり返して
我より松平より及舟伊忠討れければ、若菜既に攻落され長
藤の勢より軍すとすへり、四郎の軍うしる令し、本
り好て彼にハ勝れて落るなり軍既に後、城田及忠次
と互れ難力を討て今日の切とて賞せらる城難刀をい忠
次後と佐川及
に輝り今年六月二侯の城の先陳し八月返訪の系城終に
高奴腰より及りれし今年又小山の城攻へしとて議せら
る忠次諸女弟らせて去回り城既に高奴此後不く皆めは

こそある人、これ先世のハ、此勢を加へさるるもやいと
中に佐川及用ひ、討つは忠次を討て故伝玄入り矢を死
つて當代は類多くとすれハ、も子息なれハ、四郎に後
ろ老しあひなん長藤より此方打續きある我ハ、此勢既に
芳れぬ幾りんとす、漆とあはれしと、松井左近忠次後、松
守、周、防進出て小山の城攻らぬハ、何れものあり、さ四郎
の後ろ巻叶ふへり、今年長藤の合戦より、能き志將多
討せり、今ハ、城後の敵に伝徳を討て、れしと、此漆と
は、れ是より、後五三年、う福こめ、さ、向ひ軍せん、思ひも
あはれしと、此上ハ、忠次、漆と、及り、小山の城を
攻る、四郎、勝頼を討て、甲斐、伝徳、上、池の、軍勢、此、生、御、り
たる、志、丸に、長、藤、を、討、れ、る、兵、の、或、ハ、子、或、ハ、弟、ある、との

河の人々を引修して足楽田御恩の常丸を不におひた
〜〜〜〜〜武蔵守り陣まか〜長一八幡の敷を
打出て流るゝ水をおよぶ一兵を不知る皆りあて侍か
けり味方勢を押しせて矢一ツ射ちりある程こそあれ
身をさりと海へおめひてかく敵志はらくハさ〜我
ひ〜〜敵にりけ破れ大山さ〜〜〜け行を遠諾〜
討取りて大山をとり〜池田り陣を打ちひし時をと
とけりかけ志り〜〜〜池田り陣を打ちひし時をと
万勝勝を随へて既に足徳に打ち入るとす〜〜〜
いつく〜陣死てり我人と評定あり小牧の山より〜
とて忠次して足せらる此山まことによ〜ぬと中〜
ハ新て水陣を〜〜〜四月九日長湫の合戦

の目忠次先〜〜字位の人〜あ〜小牧山〜めら
る水方勝軍〜法とす〜〜〜秀右の多勢衆田を立て
長湫の方に地句ふことり〜〜忠次人〜に句つ〜我
ひ法りれた〜水方此地あ〜の多勢と軍せん〜大事
也い〜我〜る此料に敵の陣〜打破つて焼〜〜秀右
を焼り死〜〜〜我陣又破〜れぬと評定〜〜
き軍〜も〜一定水方又勝軍せん〜是ゆる〜い〜めと
云ひ〜れ八人〜城候り〜〜〜一日〜打
出んと〜石川伯耆守救〜〜此定志〜〜我
〜ハ此不〜〜これ取れ〜長谷後〜時を移す忠
次大〜い〜互にお海〜及ひ半〜〜〜
か多平八郎忠勝〜ハ尾幡〜地句〜〜〜

討て出の石川長門守康成も同じくはくまき出り
多うしぬ水方次第に無勢あり人々又救むるを疑ひ
し月とに忠次むろく兵を止むぬ心は福とて秀吉朝臣
は也徳川及既に小牧より返りぬ人々此日の軍ハさしや
さぬ明れハ十日秀吉某田よりつて返り小松山又陣を
取らぬわりの勢いふと云ふ救を知らぬ西ハ日保曼
陀羅寺東ハ二重堀の要害より小松山と山とあつて小
ハ赤塚尾口某田に在る近雲霧のこころさしつて七ヶ所
に陣をとりあつり水方終に一万八千人十六日にはくま
て忠次並改併を志隙として二重堀にひうたる敵の隙
のおぼやかしぬ人打て出たをへくそく陣をたるとかき
出て戦ひぬハ水方もすくみて戦ひ日既に午の時たう

里にあり水方一勢一勢引て陣かきあて志とふ
まも及む細川二重堀の要害と云うたる秀吉の
隙を使立てかきしる近くお出たは秀吉の
うハ水方ハ陣をたるとかきしる近くお出たは秀吉の
を思てけ敷小松山と云ふ二重堀を築かざらん
て秀吉のけ敷小松山と云ふ二重堀を築かざらん
くすれ敵の制しぬ水方ハ陣をたるとかきしる近くお出たは秀吉の
川斗りぬ水方ハ陣をたるとかきしる近くお出たは秀吉の
川返りぬ水方ハ陣をたるとかきしる近くお出たは秀吉の
り也秀吉がて軍勢をわくち陣をたるとかきしる近くお出たは秀吉の
勝を引て陣ありぬ人々徳川及も忠次と小牧をさしつて六
月の十二日清洲の城に入ぬ日二十三日鶴江の城を
攻る忠次大手を攻めぬハ柳原入替りて終に城を奪
しるさしつて月とに秀吉おぼくの軍勢をたるとかきしる

しこ打出打出我ふる凡九十一ヶ夜ともく徳川友の為
は打破れ伝権は中垂りはさるハとして徳川友忠次は
清海まもらせ小牧尾幡の軍勢を先三河およ川う人させ
あひしりハ秀吉を隙を伺りて又伊勢の西は後向は忠次
初と若られハ徳川友又清海の場よりあひ秀吉を
むひ此人のかく助人程ハ伝権うしなあり叶ふへうは
終に小島友に尺素し妹江を頼み於義丸友を養恩とる
又水端を渡松へ集せあひしりハ徳川友も初に上りあ
ふへしと議せらる忠次はるゆめく志ううへうは東西
再ひ軍かこるとも東家の志たう軍人うきするはつは
友も打破りて集りてへ関白へ集せあひしりるむらに
思し吾とくちせりてあてはと云書を辱しそとめ

けてけれハ雨一つの人とを先とて譜代お借の西家
皆皆は又日ハ徳川友すたてかきりり止るお神妙也
家康ハ思ふ細有りとい人関白はあきむうるを
たうやむへうは先人のうはと追て我をたうんハ
ふとそんハお出んかりハ家康関白と中遠ふて東西
は軍起るたかきりて一つなして我りんハ何はとの
事りある人きさるるうと揚人と思ふ軍も負負もせん
と覚ゆる軍も務務負必と定め頼きハ凡そ我ひの思ひ
也抑我朝二百年及ひて四海悉く我れて人民一日も
やわうはれぬは今世既やあつらんとするに
そみ東西又軍起て月をかきりて年を積る我りあくのるハ
すて並ぬ天下又我れて人民悉く七ひうせんるむ不使の

むり也されハ罪ありて失ハれんとの為に家康一
人ヲ殺りて死せん事人ゆゑゆゑしきりなすやか
くも此等を存知してよき罪ゆゑせんと思ふへ
すと仰れハ忠次長り取つてさ母とに思はさせられ
人上ハ何事をもさすに中流ハ事上流多し
とて中流の関白反上流多しとてすむハ家康人等
心をやせんせんり為也とて大座を是傍に下しりハ忠
次佐川反の事候して上流は是系の子候て候て
あひひり大久保ヲお務り又詳らり也佐川反天下と志
右き人中せ也又佐川反大改不のりありハ上流
政和下りあり也又佐川反大改不のりありハ上流
松井居るといふ又佐川反大改不のりありハ上流
也明承ハ天正十五年正月佐川反の志田小笠原関白反へ

新りゆるに忠次おとて大坂を越す今年十一月十五日
佐川反忠次家に刀をせり終日の餐宴を催たり忠
次男子五人あり嫡子小五郎忠次二男中多繼反助康俊
の事を三男小笠原左衛門依伝之小笠原掃部女四男松平
甚三郎久恒と福登の家五男因幡守忠知女子二人姉ハ松平
外記伊昌り妻是初め今川反又質として弟少せし不也妹
ハ牧野右左衛門康成り妻也り忠次齡ひりむきて嫡男
に家康り入りて一智と号し年積りて七十二松平次郎
橋本の家に年積り慶長元年十月二十八日又年しり
を扱す也又忠次の事と佐川反天正十五年十一月
嫡男小五郎忠次天正十七年十一月佐川反の依存して
上流し叙爵して之内を備ふる事と関白承年小笠原と進付

あゝんと議定ありし二月十三日家次位を承て三
河の人々又軍勢北從從す時十八年二月家次先陣の才
一めて長澤二連木の人々と下總白井の城を降し九年
関東の移りありしハ上野必椎出の城を降す三万長
五年関ヶ原の合戦ハ後陣をり圍めりる 越後の大田
九年上野必言傍の城に移る 五万十年四月將軍宣旨の拜
賀の日家次水左刀の役又候す時の名譽武家の面目と
そぞへりる家次後また常門尉と存する大坂お後の戦ひ
又將軍家之先陣ありて宗徳の大若十八人を随へて馳向ひ
首を奪るる三十一元和二年戦後必言田の城に移りて 万
石同寺四年三月十五日云十五萬ありて卒其子玄内左輔忠
務家之継初め長十四年正月二十三日叙爵一 大坂お度

の先陣は随ひ父の位を降し後元和五年三月信忠必松城
の城は移り八年出陣必言田の城を降し 万石 寛永三年九
月從四位又叙正保四年十月十七日云十四萬ありて卒
嫡男坊津守忠尚又又継舎弟等に不承を分り年四十四萬
あり万治三年六月九日は卒其子左衛門尉忠治純
大學頭源忠朝と玄内左輔忠務り二男又り遺族を分ち賜
ふ 万石 延寶三年卒し 万石 子是石見守忠宗其家を
継ぐ
備中守源忠解ハ玄内左輔忠務り三男又り遺族を分ちむ
一 万石 寛文八十八年十一月二十八日二十六萬あり
卒し 忠尚

人月とハ部々侍々ハ人徳川及ハ部々のうちも又ハ部々
多りし是よりハ程をうけよき序なれハ我内の名不
君亦をも水心静に水鏡有れ故に部々又これ又部々
入魚りれ汝ハ水心へ往くよき答應しなれとて津田
七吉衛尉信虎信長惟任五弟長常長常の尉長秀耕也耕也揚津水
一市内も水心志多くの爲にせらるる一とて長谷川竹
丸とて長谷川秀一弟多せられたり又此四弟長常男とて
ハ部々と部々の商まていり内りしき奴も常ハ信長
許へ迫く長常志多しハ徳川及も水心志と取れおのれ
及すりしきわりしきお宿をも仕て水心と取れ志多しと
御中さる同日二十一日徳川及迫に水心と取れおのれ
て水心と取れ水鏡する程に同日日ハ和泉水鏡の浦に到

りあひぬ織田及も今ハ水心上洛の月と也取康も又ハ
一ま水心ハ水心部々せりて又部々ハ部々と取れおのれ
弟とて水心と取れとて四弟長常とハ取れおのれ六月十
一日の朝水鏡して今日水鏡の方と織田及も取れおのれ
水鏡の浦に出あふ忠勝を地て上りて部々の方より取
鞆志多なるに水鏡と取れおのれとて水鏡たり迫く
よりして又ハ部々の四弟長常男也る取れおのれ世ハ早是ま
て又ハ部々の朝ありしき水鏡と取れおのれ中取れおのれ
大と取れおのれ取れおのれ取れおのれ取れおのれ取れおのれ
十重二十重に取れおのれ取れおのれ取れおのれ取れおのれ
す此の急事ハ部々の急事と云忠勝打連て引返り
飯盛の山の廻りて水鏡及も水鏡と取れおのれ取れおのれ

号ハ爰にゆゆと水依の人とをハ止められ河井九郎門尉
忠次石川伯耆守康昌一説ハ柿原小平左衛門改後ハ楠井伊
万子代後ハ楠井改大久保新十郎後ハ忠隣お換斗りと石をせら
れ出向ひあひ忠務先を由を中江四郎次郎を迫くたし
一々に尋究られて長谷川と石川竹丸相ひ集り各々
を一あま立て只あきれあきれ相打ち漸有りて徳川友
竹丸は向ひあひ敵康年改信長と相ひ恩を感ずる
半も是より信したる老の今もあきんハハいつく追も
光秀り陳新んあま押寄て信長の為に一軍して討死志
あん城無勢あてあまひ軍せんとて新兵の子にか
らんよりハ敵へせり新忠院は入て抜切て信長と死を共
ませんと思ふ也と宣ふ竹丸承て居たすも水後存する人

一と承るまして年法の敵人より信長ををや竹丸先抜り
き切て此程の如くに水後志する人をハ冥途追もはさへく
いと申はさへハ忠務水先はれと信けれハ四郎次郎男と
二人を双て水先をうつ水依の人とあハ何事の出事ぬ
るやとんとあやしみあやしと新程に及の程二十町斗り
行く忠務馬を繋ぎ返す先の人とあ人の人々を拒て忠務微弱
の身あて君を法諒めまへん事候すくまへと云へた
及の水大事今日に極めする上ハ思ふ事を先人より申は
あてゆたむと及ハ信長の年々の忠を感しあひ相へせり
水後めさる人しと水義の南門する亦なれハ誰とも是後
あまとこそ存すれさうあま信長の水後之恩を頼り
んハハいりあてして三河水へ水取りありて軍勢を程

新てあるるにちや大御軍の陣より其を吹鳴らざればハ先
陣既に打ちつ秀吉の旗の所に押立しう二番三番々押續
ひて十六番迄出ぬれば秀吉衆田を立て長湫をさしぐる
を馳す後陣ハ程引も切らず忠務此時ハ小牧の陣より止
まりさうしう此由を告げ今相より我々に西方を攻めぬ
へし馳加ちつて水先を截んとて手勢二つに分けけりハ
止めを害を奪ふる者武老衆を三百餘人を三手に振りかき
きの多勢とてを双へくは程にそるは町より過さうけ
り程も矢以追くは時ハ足輕の多に中知して後炮を放し
て敵を驚かしにふるをうり形するに水先を以て急り滝艾の
るをあらう急て戻りしれハるハ敵れて飛ひ上り飛ひ
上り敵より向つて走る水先ハ追ひて追ては忠務も川と尺

て一鞭あてるとそせ水先を法と馳ぬひて加さきの中より
追うつて終にそ馬を返り返り水先を急て追りしう秀吉の
兵をみくらそ布多う今日此振舞うる馳あてけ敵して返り
しうんとそ人ハ秀吉加さく制して勢衆に到るうちも
らされたる西方に敵陣ハ揚丹らりてや飛んすんと同
お我る終て敵陣の陣ハ小幡の方に向つて入ぬと著ふ
秀吉力及び此所に陣を築る忠務お別する兵をよ加さ
きの陣の陣ハ尺でそれとそをよけしう尺おあせしめ
る程受束りしや思ひけんかきしめて人をきけり故合六人
よ及て後徳川及の陣ハ叙又水先及を忠務尉忠をとも
あひおあに集り忠務うそのその来し軍兵はねハ若れも
せは忠務の陣と一つ又制りてそ骨勢衆に敵討せハ

るもの之くぬハ知らんとして居らるるとして居ひりし時
の人浦山しき半に思ひしに忠務り嫡子平八郎忠政後忠
守今年十六才となりしるか父より命ひ又水右衛門とて位
川及の侍大おめてこそ侍れ我絶の侍の既何傳りり有る
人として返させありしといひりり同年佐川及園東
へ水橋りありみ伊中多柳京大久保杯ハよのつきの水家
人ハ唯はへりすとすし園白及の侍あり居れハ上徳必大
森城ハ勝多地付り居りり十五石一文祿の初め朝鮮
を伐ありしとて園白及筑紫ハ水陸をめぐり肥後の水に凶
徒起る浅也左衛門忠孝長追討の水使を承る殿下佐川及
に居りりハ幸長頼年若く侍れハ忠務とも向りせありし
しとて既に打立んとせし所に凶徒七ひりりハ軍をおん

よ及を以て交長お年の秋東西一時に軍起る忠務侍を承り
み伊中政とたに水方此大名打連て忠徳必と命ひ軍し九
月十五日の合戦に流軍を下知りて軍させ我身も侍侍を
打破り私云此日忠務の首軍終て後福徳左衛門大夫
正則佐川及の西陣とあり相も今日忠務水方の多勢を下
知りて我れより居る居る志の心をさしりも相たや行く尺へ
て天明より忠徳軍より水切をと感りり忠務あり愛ひて
敵号を侍り弱めてたよに居るに居りしつれと色代せ
り明れハ六年二月伊勢必桑名ノ城と居り一万今迄居せ
し大なるをハ五万次男忠頼と居り父子共に去年此勲切
の賞とを授えり忠務十七歳の時初めて軍し大小の戦
ひハ十七を終に一交の不受殿く又終に一不の心も負す

身はてにおとろへりしにさるおも多れば一日き十四年四月
月不修を嫡子忠政と譲り伊勢必に爲り長て十五年十月
十八日六十三歳めて卒しぬ男子二人女子二人あり姉は
志田伊豆守伝孝り妻めて女ありたよき大御まをそあり

此の妹は奥平大膳大夫家昌と嫁たり
侍従兼伊豫守家永忠政の忠務り嫡男也天正十八年の夏
徳川氏の水勢秀吉の軍勢と打交り岩槻の城を攻む父忠
務浅池澤正少弼長政等と追まうり向ひる飛彦左衛門尉
元忠平忠三少弼 状名ハ搦手に向ひり敵の兵場より討
て出り徳川氏の水勢上方の人と互に先を争へ進む敵
勢より防ぎ致人の水方忽ち負志七十将人忠務り兵事
たせは志先と進み致し敵ハこころ人引退りく息をもく

これ追詰て追まのつとを攻破る城の大御妹尾下総守臨止
まうて防ぎ致し忠政今歳十六歳左力を指て海へ合ひ終
に妹尾り首めて城申よ向ひおめひてかく城申より指詰
引詰放り矢忠政り棄たる鞍のお輪にらり走せめえをり
いと立忠改誓たためり此に城申に攻入搦手をも既に
攻破て之忠政名一手に制り一不に多と立双へ子のお下
知して戦のせ父忠務り大旗を本城の中よ押きたり妹尾
ハ既に対れりり敵力老へ降人と制りて出てりり八王と
宿丹御形城を攻り時父忠務に随ひて名を召り長安長三
年叙爵は園ヶ原の致ひよハ中納言及の水信して山内よ
りせりりこれハ軍よハ合りり同十四年父の正位を譲ら
る大坂の兵起りし時之際承て伊勢必の軍勢引きりて地

向ひ再ひ兵起りし事も又伊勢北軍勢を率し大坂より向ひ
残て首二百五十二を執る元和三年播磨の赤松の城に
移る合て五万石を加へんとす同日八月十日五十二七十一
軍あり率以忠政長務三郎及赤松の娘より向ひ赤松の城に
女子二人没けてり皆是大坂赤松の赤松の孫とて少く
嫡子中務少輔忠刻初ハ赤松大坂の軍に没ひて向ひぬ是も
將軍家の娘也天壽院及赤松の娘也女子一人を能く備お
の少將忠政の室也忠刻三十一軍あり又又忠政元和五
年五月七日率以赤松の娘より没けて忠刻は赤松の孫と
りれは合て五万石を加へんとす忠刻は赤松の孫とて少く
侍従兼甲斐守長政朝ハ忠政の次男也大坂の戦も又と
一あり軍しり叙又出雲守忠政討死して其男入道丸光

つり二弟ありしハ叙又忠政より後身となる大坂赤松
足中務少輔忠刻世を承りて後元和八年改朝又又の敵
を継ぐ赤松の敵我今迄承せしハ叙又忠政より承りて也入
道丸光人あり内記正務とて波又く遠祖を承りハとて
讓り改朝四十一軍ありて寛永十五年十二月七日率以
卒する時二人の男に知れハ嫡男十五弟也及人比我不
能を返し与ふよと云て又我ら赤松をも改朝又ゆり内
記改務初め寛永八年播磨赤松の別記に承りて承りハ
九年又叙爵し同十五年に改朝り詔を継ぎ承りハ十六年
の冬大和赤松の城に移り改務り承りハ其嫡子八弟
兵衛勝頼あり赤松の城に移り同十七年改朝赤松の城に
三年侍従に任じ甲斐守改朝り嫡子改長既に長人して中

勢少捕に任し二男改信監切に任じられた改務ハ彼等
り父の遠所をも返り興人返務と云ふに父の遠所
ゆりしなる新應二年十月九日引いて己の地分ち
て改長改信に興小務の三男不改信と云ふは改
せし四万石を監切改信寛文二年四月二十日卒に子存
りし一ハ改務又我三男して其嗣と云ふ肥前守忠英也
日十一年十月改務卒する時及て改長の本所をハ万石
也悉くハ興へに我合せ成せし地万石三ツ二ツを改
長に耐ふ其一つを我子出雲守改利あり譲りたる改
長ハ改務りゆつりて流し大和守郡山の地に居り喪に
く延寶七年四月二十四日に卒に四十七歳是も子ありれ
ハ侍流源頼光朝臣の水戸の松平二男を以て継とし平八

弟改武と云撫するは原徳守忠改の娘小豆系太迫お監也
此れハ改武ハ貞徳也同年六月二十六日陸奥守信史の那
福崎に移され不承をも加へられりハ其時初て改朝昔
一於せし祖の地をハ耐しり耐五改武こと一叙爵し
中勢少捕に任じ
監物後承改信ハ甲斐守改朝り二男いとけなすて父又
おられ兄中勢少捕改長と云ふは流束制りし内記改務の許
よむと制る承應二年十月九日改務不承の地割て興小
一万石年二十七歳と云寛文二年四月二十日卒に家継
へき子ありれハ改務の三男忠英を嗣とし忠英叙爵し
肥前守に任じ後守肥
出雲守後承忠朝ハ中勢少捕忠務り二男生年十九也あり

父と同一く闘う事の合致に鴻津り降す向ひて自く首
二を切津川友の北威斜なるに明れハ長六年の春桑名
の城を破て父り所せハ大島を忠朝と孫ハ石万是を年
の勲賞とせしめへたる大坂の合戦りて孫軍家の先陣を承
て死向ひ再軍起りし事も又孫軍家の先陣を承る所の
軍兵をハ能下知し我りせ我身ハ死とり百里と云ふ事
ハ打乗歩り武志二十餘人を引きしりさの陣を掛破り
掛破り思ふさ由ハ我ハ年三十四歳み討死後忠朝死せ
し率ハ去年大坂の陣を破れしハ忠朝ハ後を承りて向ひ
し津川をよす流れて水邊に陣を張りしハ忠朝ハ又の軍せし
る此由をよす流れて水邊に陣を張りしハ忠朝ハ又の軍せし
討死せんと思ひ定むる年ハ西の陣を破りしハ忠朝ハ又の軍せし
こも中を思ひ定むる年ハ西の陣を破りしハ忠朝ハ又の軍せし
知り良き思ひ定むる年ハ西の陣を破りしハ忠朝ハ又の軍せし

西使し西目と流 壬子二人娘を甥此甲斐守改朝ハ妻也
男子ハ侍従改務也此改務父り討死の時幼るうりハ
甲斐守改朝父ハ弟を継て改務ハ改朝ハ許すむと云ふ物れ
り寛永八年又遠征改朝ハ許より讓られ日き十五年の冬
改朝ハ率以る時父改朝ハ不依とも讓られ明れハ十六年
十二月大和守郡山の城を破る 研五自く々の所をい嫡
子ハ易言常務ハ改朝ハ四万務ハ祖ありて世を早ハ以務
世徒ハ他ハ也不依ハ改務ハ合せしりハ私云 寛文十一
年十月朔日改務ハ十八歳あり率以二男出雲守改朝父ハ
所せし地己りちありハ延寶七年搦鷹山明石の城を破
り

徳也也 辰永忠義 貞徳也 忠政の三男也 十三才ありて父
徳也也 辰永忠義 貞徳也 忠政の三男也 十三才ありて父

か多

豊後守辰系康重ハ故豊後守廣高の子めて九條の太大臣
 師輔公十三代の孫かゆたるとし助助定建武年中高氏將軍
 に屬し懇切の賞として尾張必横根栗坂系高の位を給ふ
 其後子孫三河必と稱する助定らみ代の孫豊後守秀清り代
 2及て出雲守辰2随ひ系と凡^長康^の也^也秀^清也^也安^祥元
 帝三帝辰の時^時康^云享^禄二^年油^繩子^の我^ひも^廣高
 父^辰三^帝清^生年^{二十}也^とて^討死^すも^子孫^大納^言家
 の^以諱^字知^り辰^三帝^廣高^とし^後2^豊後^守と^り南^時必
 中の^者長^とく^ハ西^敵と^制り^{たり}し^も廣^高終^に二^心を^く
 和田^依傍^上地^守の^合致^又帝^に軍^の之^をう^く徳^川辰^長と
 竹^子代^辰と^りなり^ていと^けあ^くま^しま^せし^を藏^田伝^秀

同き十五年閏白反薩戸の汚辱を討收人と筑紫より白立
りし時孝後守廣孝を使として軍の振を問せり少少
若ハ孝お必忌ふの城を攻て取あひしより今ハ廣孝を
名志りる程に閏白反以威後くは加多くあひて返され
り今ハ依りの服名羊の皮日き十八年ハ條の七ひし時
重定陳して城を責大軍の今年閏東又移りあひしより上
國白井の城と移ふ二万交長元二十二年十二月二十七日廣
孝七十第めして卒日同き四年康を叙爵して孝後守に任
以關ヶ弟の合戦は中細之及の依れしハ軍をハセ
以明れハ交長六年二月是務の城を治りぬ二万十六年三
月二十三日五十五五は是務の城を卒しり嫡男伊勢守
康記又よつきて孝後守に任以童名ハ彦三弟以常字治り

て康紀とせたりなりき大坂の兵起りし時天馬の以陳の
先陳を承る再ひ兵起りし時之越して城仲よきり乃首
二百十一と切て歎る元和九年九月二十五日四十五第
一に卒しぬ其子伊勢守忠利が軍家の以諱字と治る大坂
の兵起りし時ハ以陳を止めらる再ひ兵起りし時に以依
しそ自りり首あつて以陳を棄るを齡と回らせりし
ハ十六第よりより以者し小川の城攻りし時康重十六第
初し名志り河母も又祖父よあやくぬと治下され
たり元和元年閏六月叙爵して伊勢守よ衣制父卒して以
を継ぎ寛永十一年四月が軍家以上洛の時是務の城を入
らせり彩忍の地を加へり三保二年四月十
一日を以國橋次賀の城を移り日き年二月十日四十六第

あて奉りし其子誠前寺利長父まつき金身等に五郎を己が
つ利長り五郎五万石二男彦八弟助久四子別二十一日
西万石三男彦厚利相二子石をわくり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

如多

飛騨寺後系成まむ作在清の重次り子中多ある舟助胤
後胤三河因佐川家信代相傳の由家人也作在清の重次生
年七也より贈大納言家又仕へ兼せしより佐川及の由
時よりあてあまの高名教を新より永禄八年三河武大略由
方より属しられハ此年二月七日始て作在清を重次り中多
作在清の重次高力与た清の清長天竺三弟各常康系三人
又作在清の重次を掌しめらる此時は三河の初又佛力鬼作
清と唱ふ重次ハおろしけり男のかのて也三弟各
あとの信又抄いひりよも思ふあるへき人た思へは
石蔵替又信ハおろしけり男のかのて也三弟各
知も氏と信ハおろしけり男のかのて也三弟各
うひつと威ハおろしけり男のかのて也三弟各
小重次り射りたりおもつり教十務の中又元禄らぬ徳元

延て敵一騎突し居り首を切て其首を以てお寄り淡松の
城に馳せ入りて又新庄徳川及敵進きて我城を攻めしむ方
多勢ありんばハ兵糧又續くへくは此のいりよと信有
るを次取て信玄我必と向ふとすへしよ兵糧多き高嶺
せりゆと答へりられハ候々ある斜なを以て此後ハ復り
こ軍しあり時多くハ以後おとまりりる日八年三月長次
の城落し時重次内夜三た南門信成と共に志ハし此城を
守り十二年掛川の城攻られし一方の大坂を取らば城
て後内みお川守と曰く守る天正元年の秋長原の城を
攻り武田四弟勝頼後ろ巻せよとて軍勢二手に引分て
三河を以て打出る重次此時ハ柿原大須賀と淡松の城に
向りしり重次我守りるとの料といさるる追討武田形勢入

乃信徳ハ道逆折陣お破て控るハ踏り加さハ我ハ以て
て破れんはとて三子の勢を合せて九月十日信徳ハ陣を
つらる裏の里に押寄せ敵に打破り重次人々お向ひて
信得お負ぬとすハ復りしこの敵一定助けて也来るへさ
搦て焼の籠を志むると云ふものれを也いさゆらんとい
川返り榮の如く穴山一條山縣と云ふ宗徳の志を敵籠
と合せて地帯れと以て既に門返り長原又落れハ皆お
圍に川内^{武田}初也^田の家^のお^る多^大弟^が負^軍の
の合戦ハ大坂の中又切て入よき敵と引絶て敵をりて首
と取る敵八人の中又死せられハ方り切り也る敵ハ八
人此を揚り七ヶ所を首の既に危く足へしおり弟を
一人お合て二人とハ切り控り踏り敵を追拂ひ加さし命

ハ生てりり日四年五月十一日尾崎の士百勝重次り手に
屬せりる日七年八月三日及の山事ありて後重次信と象
り尾崎の城を占る言天神の城あり時重次り子討首
十八指的人を生捕は日十年の喜成田七ひ日寸夏成田
反討れあり甲斐信忠再ひ取れりハ徳川及信忠又白ひ
あり小條も日く彼ふと重次ありとすへりハ其勢を
引多て後河必也攻入らんと重次沼津の城を占る一説
次ハ江尾にあり沼津とハ松平某の如く九月二十五日小
田防と原親とありと云ふ不慮
條の軍勢龜山の城より打て出て戸倉山に到る重次逆奇
りしてお破り龜山の木戸口追追逐て首三千餘を切て引
返す日十二年小牧に陣あり時重次伊勢必尾崎の城を
占る蟹江の城を攻られり又是陣して城を攻るは斯く秀

吉信雄中書りしあり信雄に就て於義丸及を普忍と一玉
少時重次り子仙子代丸も石川伯耆守教正り子と同一く
けてありは抑此於義丸及と中後ハ徳川及の山二男あり立
りて生れ居りせありより重次なりて普忍とせ今年
明年十一又制あり部に上りせあり子を山名孫惜りく
思ひりハ我一人子ありて重次なりて仙子代丸付てありせ
たり秀者より人ハ於義丸を普忍とすると披秀者れ
と内ハ此人を賢とし徳川及又親志ありん孫あり立
り見れ本多ハ孫に披秀信代のおとあり也其子ありせり
りこと嬉りれと收ひあり斜なるは去程に秀者正一
位内大臣又歴より関白の威に制りて於義丸及も又披
させ秀康と名乗らせ従四位下左少将兼三河守又任一信

権江を嫌とし徳川及水上流の事を進めありや及
へた上りありへたすへは是より後三河守及もろしな
れさせ給ふへとなし風すは三河守及の母此よりを
す玉ひも及うしるりれありて後一日も世にならぬへ
しを免く此死ハ一而ならぬおめと忍びて大坂を望ら
せあり重次ハやと仙子代丸部よおまけ人の疑ひある事
も詮あり只一人我子失ハねんも不便也と思ひられハ母
りいりり以の外は皆一の味ありてけ世の味乞をも
はる勢を也と書及へやと呼運ひぬいく程もろく石川伯
耆守救正ハ徳川及も書及へ書及此所方又集る相と書
次り二心ありお取れて流し思慮深く思ハられ加くて冥
白及の信あり仙子代丸とく氣を以てと書及より此使

夜くに及ふ重次も詮方なく是もいりるおれ且ハ母の
病も幸以堪子思慕ひしおなれハ今更氣を以てと書及へ
すと伏流に歎きぬされハ息男り身代ハ此老を氣とす
るまをゆとて甥の源四郎富正を氣を以て冥白及あつぬ
事也本多めにたえりれけると思ふあり大方形をす
かりりる程に又東西の軍起りなんとすへて宗徒の此
事人申書傍の城守多しきものを撰りる本多依後守正は
形りて此城枕とて討死仕多しきものを信付らるへ
とすしりれハ此重次めして書傍の城を給る救百務の
兵を屬せらる此時重次此城を乞せし事あるて再ひ尺集す
ひて是男成重次八月八日と志る事此お多冊下及へて此書は天
也冥白及いりありとて徳川及と親しくなると歎く

河の人々の四方にふさふさありむハ今川のそに備ふハさ
由修下されしハ各々人質を多しせて多要害をするハ
後修を承り吉田の城に備ふハ一とて小坂井糟塚の要害
構へて子の老をを務重嫡男忠忠をハ号修より多しせて
ハ水軍の忠をかき 此時の黄とて賜ふハのハカハモ後
忠忠不方よりして 舍身彦八郎忠次又り法を法く忠忠
典足才徳川及の水為に吉田の城攻めるハ一とて多し
て忠次ハ随ハ号修に承りて形とハ徳川及大に悦りせ
多しとてハ忠忠二連木に形向ハ戸田を反命とお修多
しと修りハ水軍を招きて老ハさる 此時揚りハ子の孫の孫
ハ修りハ水軍を招き向られ糟塚を反命二ヶ所の要害を攻
られ忠次忠忠を招きて水軍を出され吉田の城を攻らる

忠忠号修て多しとの大とて城中のその大思ひくになり
て多戦ひたりしハ一とて忠次忠忠戸田小栗城使として
城の大守小栗把守り洋より多しとて戦ひて城を
多しとて後河の由に備ふ此年永禄七年六月三河八郡の地
ことくく水軍に属しられハ忠次一切最大制りして忠次
多しとて忠忠典戸田小栗号又おのハ正徳の地を多しとて
此時の忠次とて多しとて忠忠典戸田小栗号又おのハ正徳の地を多しとて
石川忠次とて多しとて忠忠典戸田小栗号又おのハ正徳の地を多しとて
典戸田小栗号又おのハ正徳の地を多しとて忠忠典戸田小栗号又おのハ正徳の地を多しとて
宛の地とて忠忠典戸田小栗号又おのハ正徳の地を多しとて忠忠典戸田小栗号又おのハ正徳の地を多しとて
の戦ハ忠次河并左衛門尉忠次と陳を同じて戦ひ天正元
年三月三日辰のハ水軍初日随ハ弟多しとて足助伏地二川の城
と攻めし三年五月長藤の合戦ハ河并左衛門尉忠次と共
ハ考ケ桑の城攻め 同九年三月言天正の城攻めし時首二

嫡孫隠岐守康慶未知らるるハ二男兵部左補康将を
嗣と以康政其娘を以て康慶に令せ延寶七年六月十八日
康を譲る康慶叙又兵部左補康将又康将子誠部忠恒又あつて人子をもて
しうハ此ゆふしと書る

織部忠恒ハ兵部左補康将の男隠岐守康慶康将譲りて
又てかのり不依の内をわうちて忠恒又其ハ奴部壘田一
与恒部伊
任

藩翰譜卷之四之上

井伊

侍従兼兵部少輔及系壘改ハ宗院のた大臣冬嗣公此七男
内舍人良門五世の孫備中守共資の男を江の木の匠人并
伊備中左共保の後胤肥後守共資の男也共保の弟共保
村あや初め一條院の御時備中守共資を江の木の匠人并
ある正月元日のあつた社政は共保の弟共保の弟共保
の系子たちあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
やのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
いとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
女子のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
系とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
又あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

よありしを忍びて今日共世の産るは終りて
中守共資ハ内舎人辰門の弟三男兵衛利世
大由高屋二人のみよて利世と云ふ人
系由系國少あはる七十年一條院の時
由ハ凡そあはる七十年一條院の時
年及らんと人多く大権年ハ
國及らんと人多く大権年ハ
江流の辰氏たる由系國ハ辰氏ハ辰氏
南赤の辰氏也辰氏ハ辰氏ハ辰氏
少てこそ有れ辰氏ハ辰氏ハ辰氏
足利辰の辰氏天下悉く礼る及ひて
くハ後河の守護今川に属す若保
平も今川に随ひりる也平二人の男子有
楠重宗二男産次命重満と云肥後重
辰初め重宗系一子信忠重重盛又
辰初め重宗系一子信忠重重盛又

男子ありしかハ叙父重満子肥後重重親
人子と契約に重満に重盛重満重満子に
まの家継せんとすを嫌ひて今川信親左
り孫叛の由を終りしに天文十三年辰
河の國府に反て忽に誅せられ死ぬ
盛義元と云に尾張の楠稜の合戦に討
流既に従ぬ肥後重親子兵部重重親
て父よかれ重親重親子兵部重重親
はは人重親此幼あまとの辰氏の人
家の終ぬ事とありれませしお侍の
谷の地終て若根重重親重重親重重親
多くはけ又木段重重親重重親重重親

教に制りて引返す所を不_レの戦ひ秀吉の軍悉く利を失
けし徳川及助け人種ハ佐藤頼_レけんり叶ふ一か多_レはと
てお留及_レ中_レありし_レ故_レて此人_レは_レ治_レきて徳川及の_レ水子_レ種
義丸及と乞_レきて_レ義_レ忠と_レ制_レする_レ是_レハ秀吉_レの_レ軍_レも_レして_レ徳
川及と_レ戦_レふ_レ人_レと_レ斗_レり_レあ_レひ_レあ_レり_レす_レへ_レる_レ事_レハ
事_レハ_レ詳_レり_レ也十三年三月秀吉正二位内大臣_レと_レ制_レり_レ七月関白
は任_レ後八月信徳の_レ志_レ田_レあ_レ房_レ吉_レ昌_レ幸_レり_レ関白_レと_レ組_レる_レ事_レは
信徳川及_レ又_レ背_レき_レり_レハ_レ水_レ勢_レを_レ指_レ向_レら_レる_レ水_レ方_レ利_レなり_レし
と_レす_レて_レ吉_レ政_レ吉_レ政_レと_レ向_レひ_レ水_レ勢_レを_レ送_レる_レ吉_レ政_レに_レ関_レ白_レ徳
川及_レ又_レ對_レ面_レの_レ事_レと_レす_レて_レあ_レひ_レり_レと_レ又_レ兼_レの_レ事_レハ_レ叶_レふ_レへ_レり
り_レす_レと_レす_レ中_レ新_レ業_レ一_レ故_レひ_レあ_レひ_レり_レす_レ川_レと_レ兼_レ出_レして_レ水_レ味
恩_レを_レ後_レ松_レの_レ場_レに_レ兼_レせ_レられ_レ水_レの方_レと_レ向_レひ_レり_レす_レり_レと_レ

又兼の_レ事_レを_レ澄_レし_レる_レ徳川及_レ既_レにか_レく_レむ_レす_レ得_レられた_レる_レ中_レと
あ_レり_レん_レり_レハ_レ事_レ者_レ又_レ向_レひ_レり_レす_レて_レ無_レ禮_レハ_レ及_レふ_レへ_レり_レと
信_レり_レれ_レハ_レ関_レ白_レ及_レ信_レひ_レあ_レる_レ大_レ方_レあ_レり_レん_レり_レハ_レ水_レ家_レ人_レ等
り_レん_レを_レや_レり_レん_レせ_レられ_レん_レ為_レに_レ水_レ上_レ洛_レの_レ種_レハ_レ其_レこ_レ止_レめ_レ兼
らせ_レあ_レふ_レへ_レり_レと_レ大_レ殿_レを_レ下_レし_レあ_レり_レ徳川及_レを_レれ_レき_レも_レ及
ひ_レ得_レり_レり_レあ_レと_レ信_レられ_レり_レと_レ大_レ殿_レ既_レに_レ水_レ首_レ途_レ有_レり_レと
す_レへ_レり_レハ_レ是_レ傍_レの_レ場_レに_レ向_レひ_レ入_レり_レあ_レひ_レ吉_レ政_レと_レ水_レ勢_レに_レ止_レめ_レら
る_レ水_レ又_レ兼_レの_レ事_レを_レ終_レり_レて_レ後_レ種_レあ_レる_レ場_レに_レせ_レあ_レひ_レ故_レて_レ大_レ殿_レを_レも
返_レす_レ事_レと_レせ_レら_レる_レ事_レは_レ吉_レ政_レと_レ送_レられ_レり_レと_レ吉_レ政_レ関_レ白
及_レ又_レ互_レれて_レ管_レ應_レの_レ事_レあり_レる_レ川_レ出_レ雲_レ吉_レ救_レ正_レハ_レ伯_レ耆_レ吉_レ傳_レり_レ互_レ
吉_レ政_レり_レ吉_レの_レ傍_レあ_レれ_レハ_レと_レ接_レ伴_レ又_レ出_レさ_レる_レ吉_レ政_レ救_レ正_レ又_レ
打_レ肯_レす_レ飛_レて_レ面_レと_レも_レ合_レせ_レる_レ及_レ下_レ自_レり_レ事_レは_レ兼_レ然_レして_レ終_レり_レす_レ

に至り救正又接伴に重改りし人の人よ向ひ是に侍りし
救正に代わつた侍の主人は首事多し居下に随ふ大徳病
の男重れハ直改彼と肩をぬく孫を組んず此先と数人
さよふはとすれハ此先より合ふ人々皆吉とそ振ひ
りり十六年四月之上関白殿へ以幸有り徳川殿も幸せ
多し此殿人等任及の多し重改ことに侍後迄五位下に
重改れ兵部少輔と兼ぬ十八年の喜美忌始て関白殿へ来
りあふ重改れ侍して是に當り此年の長関白及お摸の小
條を付れしに重改徳川及の忠謀有りて小田原の城は向
ひ達地より押寄て陣を築る六月二十二日の夜重改一勢
外郭を攻破る松平周防守康親曰く〜〜〜後々城申あも山角
上野舟父子三人次の城を奪されしと散々に防ぎ致し後

く此方お見れハ重改康親の返り此の時小田原の城を
軍兵二千人我ひ万勢の中は重改りし一勢は東へ向ひ
改破す城の中は重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
徳川及初め重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
と格好ひてらるる重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
て西におもはれし日未だ重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
りて悲しむる重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
云ハれさう程の事なれど此の心付なりと重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
似合ぬれり重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
ふハハ此の攻められし重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
也ハハ此の攻められし重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし
三科紀お見れハ重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし一勢は東へ向ひ又重改りし

と有りて天下此軍勢を信し関東は攻下り上校と牒
し合せて徳川及を討んとすも幸下徳兵小山の山隙に
ゆり依にさむりし徳大名先引返して上方に向ひ軍せん
とす此時武政布衣中勢少補忠務と私にお尋つて徳大名
と有る地白ひ軍休むんとす徳川及上方のありさむも
いふし又此人くの心を斗り難し汝に向ひんる御多へ
かすすと信られハ此人と斗り向ひて搦軍志すもんハ
天下とハ我軍りありてこそ内府ハ幸とせりといふ
んるの口惜しういハ御多に水ゆるしあれと云ひし
ハ下也書及と海防のた得と一後又廣く書及と水軍軍を引
ハ兵伊中多と指白らるるさこそ九月十五日の軍とも
改りさより始められ新て水方と合せて搦軍し徳川及

てとせあひ東西の軍兵徳兵関ヶ原より搦負を決
武政子の老老に下知して軍させ我身ハ下也書及の
とあり書及ハ武政及ハはた又水軍ハもあなる水勢を
ハ爰に止のられ造り立去かくむせられ先陣の人
軍する振を水浸あるとす水とすし水依して福徳在
左支正別り陣の賑より打出んと先別り士徳也今日の
先陣をハ福徳り移て水をいさうけんとすハ水に狼
藉くと押止む武政是下也書及先陣の人々の軍する
水浸あるへきとて兵伊の侍長り水依にさむりふさ
ハ水勢大らせられ水浸ありとすお尋若くかす
はとて及を聞くことを汝と死ぬきかすの中は切て
入り散るに我ハ書及名をせさすハ見れハ打破るけ

色りて与反と一不にるを立て是はき振たり新るあるは
津兵庫入及惟形負軍して人斗りのけりよとに致ひる
のりるを志のめて是は形重改り士は信これ通れと云ふ
重改あれハ味方にと答ふ家をする切の半はと云
ひもあへぬに重改るをせし追りくも反もはくきてか
けのしは信り兵をて返して致し与反組打して水多を負
られ重改忽ち後炮より南りるより是の信はも終に遣れて
りくも反も重改も多のりらぬハ水信して水降るある
徳川及ハ重改りも反もし是とせ軍せしる者ぬりく返せ
多ひはりハ日教意くは初めより入及一人り生延りぬハの人の何程の事
は續くハ方おもし止めんといふぬハの人の何程の事
ひて是をと名ひてぬりしと志すはと云ふの由を云ひ
甲斐の武田より致すありしと云ふはと云ふの由を云ひ

一ハ重改りてぬは延て幾ひしと云ふは重改りて与反も重
改りてと負りぬはあやうかつくは重改りて与反も重
と人川上ハ瓜原したる大之り是兼柏木は右のりハ信はの事
る由と名ひてぬりしと云ふはと云ふの由を云ひ
へき是際と揚小令吾中細言秀秋ありちに云ふれはか
ハ重改二階と定められ城をハ終に攻むる新てあるの由
敵一時にふひくは本年十一月四方せし徳大名と惣切の
賞と揚小明れハ六年二月重改に石田り信せし追江の
地をあり五万石と修せしと云ふは七年正月従四位下に叙し
同年二月初日年四十二歳めて卒後
兵部少輔系重捕ハ初ハ大史也徳信重改の嫡男也初重長
七年生年十二歳めて父子継く同九年の表終りよりて是
根の城築りれて弱る同十三年伊賀の首井り信別と云ふ

家の時又地加へられ五万石の年月いふ初め又西加へられ詳す
た大治元年代志し先ずれ初め又西加へられ詳す
は終ひし年月と詳す初め又西加へられ詳す
て大治二年六月二十八日に卒し七十一歳嫡子頼貞依止
徳いりありありなり大治元年十二月二十三日
世を遁りて入るは二男五寛辨三男五繩内通世とあり
は四男玄葛は寛治二年四月六日継とあり父卒して
家を継ぎ其年侍従に任じ又従四位下に叙し寛文五年四
月在り又掃部頭に制され延寶三年十二月二十四日又
卒し其子玄葛は五寛の男五徳に継ぎ世人を
寛文十一年十一月二十六日水ゆりしを蒙る日十
二月二十八日従四位の下侍従に玄葛はあり五徳卒し

て家を治く

神原

式部少輔源康政と伊勢比仁木りふれ也右京右支義長の
 の後胤志郡神原の任人七郎右衛門清長三河國小坂より
 源藏人及小次郎志 侍へたる近保の比とひ南木井田の戦い
 子息を改十二歳父清長と古に軍して高名を顯し石田
 山中佐川記と云 長政成人の後七郎右衛門と申す永禄
 の五年に死し其男子二人兄ハ孫十郎清政後七郎と申す
 弟ハ小平左衛門康政と申す康政生年十六歳上野城の戦
 ひより名を顯し永禄六年を後佐川及に反れ弟より
 侍へ弟をせめて成人の後山澤の字ありて康政と反れ一方
 の大將を承る永禄十二年七月堀川の城を攻らる三河
 康政先陣を承り十一年二松平勘四郎信一と互ひ先

て秀吉亦この軍に打負はく信雄は中絶り徳川氏によ
しみ給ひ終に水妹を淡路へ奉りせらるへきに事定むる
康政部へ奉るへいと云み給ひしりハ部にてうりて馬
田左近將監り部を康政の旅鞍お熱せらる康政部入り
し日圓白反彼部よりせり康政の子を死に今日の日對
面して路しし水妹若く小牧の陣にて康政の方の掌に
懺悔し大患忘れて之思の子失りんとする愚逆無名の秀
吉に組はる事や有ると云ひしりハ秀吉怒りにうすし
て今の康政生るる事なれん志ハ勅受こみよする
へしとて下りしめりしりハ徳川氏と云ふしうなりたれ康
政のことは敵人のあはれしりハ秀吉收とハなうたる也
明日の足弟野傳をに思へハ思ひて奉りたるハいりめと

終に康政反へ奉りし時水もてなり云聚るものへられ
す水嫁娶の式任合され引出お多くむつりてゆさる程な
く水妹を中へひしに先康政の部へ水樂を奉りしり
くろくせりひて奉りしりハ十月徳川氏の依りて
上洛は従五位下に叙し式部少輔に任じ日圓白反の執り
されし反也徳川氏の水部人任友の娘とれすへりる日子
十六年反下水條の上洛を催する民政氏五宮ふ者ありて
水條長徳守氏叙を部にてせられしに徳川氏より康政
を副らる水條の重みに任せ志田安房守昌幸日圓白反の任
なりて上洛は浪田の城を水條へす日圓白反の時も康政日
圓白の使又副て志田に召命し物れは水條終に上洛
なりししかハ日圓白反に攻られ降人となりて

事り多ししりと氏政は自害させ氏重を八分けらるは
西使も副られたり此年徳川及赤松へ移り西使の時康
政も上野に被林城を築き四方園白及佐らるる旨ありし
故とて少へし同き年十二月陰奥に送後起り徳川及西使
治者多へきめて康政先陣送り既に打立せありに本年
ぬと告ぐられ八十九年正月十一日忠孝はより引返さる
文禄元年二月二日康政中細言及には人をもくまじし信
中さる老長三年の秋右園薨り多し明れは四年の正月大
坂の事行人も徳川及赤松と謀る潜るに軍兵を
僅く伏見の西被築りんと此由既被露して徳川及に
地多て西被をす獲せし大名も少からし以康政此程赤松
より上るとして多しとて教とりしつきて地も厚とに

近江の勢田にあり徳川及赤松とて此所に新園を
立て従来の旅人を止む徳川及の軍勢既に勢田に地多り
て雲霞の如く疎るると大坂より少へしハ多やはくも
来り以康政勢田より止る事二日月二十八日の夕暮に冥
を園く此も詔必より来り集りたる旅人を只一時は大津
山科也磯碓根谷を経て赤松伏見へ送せし是と見る人あ
かひ多ししとの赤松の勢也何万騎ありんと云ふも是
又秀忠中細言の多勢を引てより一かと云程に大坂の人
人人心かられし終に和らきりり此夕康政大坂より成
るすにて地多ししハ徳川及大坂に脱れせむし自
赤袍きてぬひりり同五年の秋奥の景勝も追討の時康政
中細言及の先陣打てりし事とに上方より軍起りぬと

少へて是此所の軍をハ止め引返して上方へ向させり
へきめて中納言及ハ山原を打てよとせむに佐徳の志
回り上田の埜に楯籠りて水勢と遮らんとは中納言佐徳
正伝あ房さう勢をて埜をかく戦ひんす叶あへり只
打捨て行時もあり水より有りて海原の軍の楯をす右合
さるへしと申するに大當の人くちしたる埜の兵と
逸りて軍仕か埜既になへりしと佐後さう制し止め
て小治の埜に水際移させ兼せ軍せし事を羅料と受は
是水巾知を侍にして軍せし成也りう爰より石原を絶て
上らせあり正伝う斗らひして去るはくこきに迫ると
さけられし成ちりしう康政ハ志田の軍世人指いり
とのるり者んおかるハ蹴散して埜臨破りてらん

するものをとておのう手勢計りて埜迫く押通るに昌
幸あへて止めんとせし関ヶ原の軍事終りぬと成り
す右中納言及埜の埜にいきと成りせりして水とすめ
られし埜に迫りて水勢の弱りて佐川及に兼りて成り
されし大内内く水勢よりかきさる事有りて三日
を過る迄水對面せしまたはこハいりたる事と水家入
りおとろきありしやして山原の水はよさむしひし事大
に恐れおのく康政救り入て佐川及の水おに兼りし
此度中納言及水不慮驚させり事康政守り羅料をから
りるへかきし但し風波のる事不慮中納言及上田の埜を攻
落しむす又ハかくても水邊なく埜に海原の合戦も
も合しせありぬる事不慮有ると成りしひぬえし此條

よはりんはハ恐れ有る中子に少く大反の勢も急
しもあつた柳屋ハ今月^{九月}朔日江戸を以て途ありて
日十一日尾張の西清洲の城よりせぬひりうに二日
とて英徳山へ西陸を進められ十六日に到りて西合戦
半平りぬとハ毫も父子一西に三成等と西誅伐有ると
思ふられぬハ兼て軍の西を途有るとも若させぬ
又海乃よりも西使を弟せられ山原の西勢を潰さるへ
さるなりは又今志りて清洲の城に西陸を止められ
山原の西勢を潰せぬと三成等と誅いり西のより少
きよふと西軍をハいりせぬひりやも人物に只
今又西りて偏に中納言及の西急りとのみありせぬ
西不運とこれ中へけれと悼ふおなく中はれハされハ未

そ八月晦日の日使を地て明日首途はと岩山原の勢も急
き地よりて軍の多合せよと云ひつれと宮本康政さん
西使今月七日は小治の西陸へ来り早ぬ夫故よこそ中納
言及もおとろくせぬひり西急り有りて西ひつれ
たより日本才一の難本と承る本秀の細原を大面を冒し
大軍をひきひて一日中よ十五六里程を西るをせぬ
れしハるも人も皆つれ果て西ひきと中納言及やあ
ま使ハいりよ形ハ遠く来り西と西使をたて西紀向
ありしに霧面帰りて雲りし水くさ場人馬の通ひ後
て西夜に連参に及ひぬと中納言及にて中納言ハ又上田
の城を攻むハさうハおひりの大あかりに誅め止
め弟とせし故之中納言及ハ攻破りて西通り有るへ

と申後身うしりと年死する事と付られ事とせられし
ハ諫をもあ諫をも執れとの申すはたと人申す叶
せありぬる事り我言り諫斗は志しりせありんハ大
友の申心は任せらるるはあはれやと申る上ハ申心
も任せぬりはされと彼城とせありせありとの争ひも
りとこそ移しはひつれ夫父子の申申きて海とせありハ
元のもれ申教訓はハいう程の申勅命もなとありんハ
年も壯はなとせあり申子の終末ハ天下此事をも志し
めさるる人きをとり夫れその乃父の申心に叶せありハ
りしと人の悔り申さんハ申子の恥辱のみにあはれ父の
申身もいりてを許しをせぬれさせありハ是程の
申を意のましまさぬとてたてられと涙とありハ諫め

なれハ徳川及申心とけて明色ハ九月二十五日伏見の申
陳より申對面ありて海原の軍の振を申お語りあり山原
の事をも問せありハ中納言及自りて申筆と添られ
康政ハ此度の心さし我が家の者ん限りハ子と孫と玉
りても忘るる事有るまじき由の申書を語りしとてすへ
りし初て此程の軍の苦とも慰めんと侍従申改申中督サ
捕忠務申康政とちに款一飲酒盃のみ遊ひしと申改康
政は向ひておも此度私及り事を忘れて諫め争ひしと
よりて申父子の中平うせ海とせあり申家と國との申
のみにあはれ元世の為天下の為とて信れハいりある
事も初も申ありぬとこそあれと云ひしハ康政も心
よけは是れしと中督申捕是をすて申改の宣し申勿論也

されと爰に忠務の心持ぬる一門あり康政云ひ聞きあひ
めんやと云ふ康政云ふ何ぞあも有れぬんと言ふ
忠務和返り大反をたすう程に諫め申せし男北佐渡守正
伝の後よのみ従ひしこと心持ぬ我等三人うるハ佐川反
まゝる忠務と天下此人をもゆるされぬち矢張りその
乃ハ康政の諫り申さん事大方さみし中人ある句しく
そのをなと和返先陳しそ一日の中よ志田の城攻めりて
とく水供しそハよぬそもしさも有んよハたそ人海
乃の合戦よ合りせむつはた大反の事及ケ程まてハあ
らしとさそハ又和返り方を控て諫め申すも及あまし
と思ふハいうよと云ハ康政答ふるに詞なくして三人
一日よおあひ救益の具とを流るる康政と忠務とハ同

年よそ日地よむとありしうハ知けあきより互にあひ
しかりし所常にハ新事とも云ひ申すひるると也同十
一年四月康政敏林の城を築し師長將軍家大に登りせ
あひ酒み雅系以忠世^{康政}二井大牧以利務を右汝等速
やくに医師を以て心及り人限りよきに治癒を加へよ
と仰下され又日々に水使身りて問せあひしりと終に五
月十四日五十九歳よ卒しぬれハ水歌き流るる以吊
使として阿部留中守正次郎向ひ野あふる多し康政大次
賀五弟は清門娘よお婿して子四人と申ふく婿男ハ亦祖
の世継と制る大次賀出羽守忠政是也次男を江守康務一
人の娘ハ酒み雅系以忠世の妻と妹ハ將軍家の水菰女武
藏守利隆の室也少将忠政の母上也を以て康務又う忠と

継ぎ交長十九年の冬、將軍の忠誅打て大坂に向ふ
元和元年の夏、伊掃部頭重孝先陣となり、康徳二陣は定
めらる。古兵刃れハとて、夏田能也守伝右と康徳は副られ
たり。秋、五月六日、重孝本村長つちと若江まで、致し
康徳曰く、致んとし、能也守割して、味方の多勢は向ひか
向て軍する敵の陣の張振のうききこそあやしけれ、あの
参田の處に續きたる繁みに、勢引隠し、四方掃く、衆を破れ
たりん時、又打出、致んとし、是印る、伊既に掃ぬと、是印
伏兵今又起り、なんぞ致す、打破りて、控へ、まゝのと云ひ
り、小敵思ふ、まゝも似、破れ、走る、康徳は、手に首、少くも、打
斬り、以、明れ、ハ、七日、天王寺の合戦に、康徳、昨、日、軍、せ、さ、し
と、憶り、て、二、陣、は、定れ、とも、重孝と、押並へ、て、陣、一、敵、の、多、勢

亦破り、首七十八、執る、能也守、伝右も、自く、手、二、ヶ、所、を、負
て、手の、名、は、首、切、り、せ、たり、あ、り、不、康、徳、伝、右、も、手、の、威、の
任、蒙、り、形、多、し、曰、二十、七日、康、徳、風、毒、發、於、ひ、出、り、年、三、十
六、也、ま、て、俄、に、死、に、あ、り、大、に、驚、く、せ、あ、り、是、後、守、右、も、手
康、徳、も、る、也、な、り、し、と、致、れ、し、ま、は、あ、り、に、追、寄、る、は、
て、り、し、合、戦、ハ、及、ハ、さ、り、し、と、宣、ひ、し、は、是、後、守、か、り、こ、ま
つ、て、伊、本、村、既、に、致、と、合、兵、康、徳、も、手、の、名、は、同、く、を
み、致、人、と、し、夏、田、能、也、守、伝、右、康、徳、と、共、に、是、を、割、す、伝、右、去
る、兵、と、形、さ、い、し、し、謀、也、者、と、ん、と、存、せ、し、に、敵、終、に、破、れ
し、ハ、軍、ハ、合、兵、康、徳、い、ま、し、年、三、十、一、は、よ、う、と、ん、清、く
こ、ろ、志、し、し、く、れ、と、存、せ、し、る、男、の、姓、ハ、し、ま、也、伝、右
と、心、を、合、せ、て、進、み、城、に、入、れ、ハ、天、王、寺、の、合、戦、ハ、隨、一、の

久保と云ふ一流あり又破河玉と云ふと名ありしと詳く
此記の志るせし不字於此の後大久保と名ありしと詳く
成るに似たりされハ家信の傳蓮帶り四代の孫宇津八郎
万石又ありされハ家信の傳蓮帶り四代の孫宇津八郎
衛尉某初め松平和泉入道及信長此後子孫永
く南家譜代の侍とハありたり其子次郎右衛門尉忠貞
其子右衛門五郎忠武と云忠武の世初て大久保と名あり
り) 南家傳の侍とハありたり其子次郎右衛門尉忠貞
稱せし又長親の位爰に南家の信人松平宇津八郎尉昌
安其才ハ忠傍の城よりなり山中の地とも兼領し東
三河悉く討從つんとし和泉入道四代の孫宇津八郎三
郎及信長十三の年水原野原人及の信忠傳り更あひあ
祥の城より信長あひ知けあきたり水原も別より信長あ
ましく十六年の水原先山中の城攻めんと誠せらる忠武

諫めあせせ大久保の侍と云ふと名ありしと詳く
六年の四月風烈しく雨志しき日水勢引きて山中の城
を襲ひ奪る此勢ひ又争して忠傍城をも攻らるんとす
へしかハ津正右衛門尉大よおそれ急ぎ奔退となりて忠
傍城を奪りあき及二弟三弟及忠武を召して汝切莫た
也恩賞請ふようんしとせし家信忠武承て忍ぶ忠武く
さんるめつしかりて子息皆一不懸命の地下しあひ
某又年老よりなよの色うはへきとす二弟三弟及宇石
丈切有るものや賞あり一人切と賞するのよあ
すわゆるの忠を勤めんりあ也汝辞する事有るへくす
即ち又忠めとかさ初て信下するありハ此もよちゆる

井つりさるる侍もんは老やふも福の料ハ以ひなん
すといひあき福のる也とて水ゆきと慕ふ忠武天文十
六年二月四日死しぬ男子四人嫡男ハ新八郎忠利後二
右衛門とハ一利發二男左衛門四郎忠次忠次の子阿部定
阿部四郎忠政と三男甚四郎忠貞忠貞の子阿部定
忠隣り祖父也凡四男孫三郎忠久とハ一忠武の孫子也
初めて大久保と名乗るとあるとせり○按ずると幾福なく
山中の地を承りし大久保初度の大切也幾福なく
て二弟三弟及世をさしせめひ嫡大細守家水常廣忠此時
ハ承り承り又ハ成りあふと内孫正信定出雲守
二男二弟三弟是傍の地を承り承りせし事ハ二とく奪ひ
取る安部大藏を初て水家人かき忠忍の所依り大久保免
才ハ残り止る安部伊勢の所より駿河の玉府さおもむき

今川及を頼くハ義元朝臣軍兵をさしそへて三河水年
呂の地は若君を初め承りる天文四年二弟三弟及失せ玉
伊勢の津戸は越きを江の貝塚ひ橋大船をさし日守内孫正信定屋
すくぬ事と思ひ此上ハ大久保兄弟又心ゆるすへく
はとて新八郎忠利をめぐりの八幡の神及も二心を
存らましき由の起清文を一日と七牧清、三日またこり
かきせし忠利舎才等とちうつけん者も人水家人誰う
若君連つんと思はさるへきまにかく我をさしうふ年以
の布衣祭せしれぬ事もしかそる弓のちいりか悔た
及ふましとて定年呂の地は牒状し思ひくに出一門の人
とて始て藩代の水家人かき信り天文六年五月朔日忠隣
地をうそひ返り忠忍を連く初める此信り四弟及信定

次入乃久記又へたり○按す同十六年の事
るは是大久保の二大田の二
志武世は也蔵人伝孝羅立て不常没収せしる信孝大と驍
き今川及はははきくあやまうなき名を中披うんとは是傍
及別ち大細と彼罪科りわくすときゆるし給ふ信
孝深くうみ給ふ世云記して軍世人とは此信孝と甲八
安祥及の忠身是傍及の忠叙父とて譜代の士あり其忠に
附する甚田忠貞忠三忠忠久足忠と彼手に属し兄弟傍
孝と向川て我号伝孝の節号と形す之忠の信教して彼手
は是小孝也いうて返逆の人と記して正しき忠も有く
へまひき是傍とあふんとまひしうハ人く皆むくと同一
て是傍及に地系る伝孝彼号と形す之忠を軍世人とハ思ひ
つれ今ハいりあも叶ふへうすとき踏り止まる兵五十

七勝を引合し尾張のふと執むき誠田留後与伝秀と是子
の伝長也伝秀大とよろこび信孝に頼内させ三河ふと白
川て安加しこ攻入是傍及今川の加勢をめて戦しんとて
徳川及は川り六歳と制りあふと駿河のふとあふせらる
初るふと田原の戸田心替りして是忠伝秀り者にうハた
れむひいく祝あうて是傍及隠れさせあひ留後与伝秀も
うせぬ是より付れし人今川及いりまもして是忠を運へ
人として今年天文十八年十一月安祥の城を攻めし伝長胡
臣の舎才三弟と信廣をとりにし徳川及に留らる大
久保り一族信廣を送て是忠を運へ返すつす
師の記はつすひらり也世はつあはる法記はハ此る是傍
及の互世の中事とあふすハあはる水記はハ此る是傍
弘治元年徳川及の忠家入今川の從從と隨ハ此時佳川及

彼河は流らせ尾張の必懸江の城を攻め新八郎忠利甚四
弟忠貞負う嫡子七郎右衛門忠世父子兄弟あり七
人先裁して高名を顕し凡凡部四部五部七部八部九部十部
城七中陸と云れし也四部五部七部八部九部十部阿部同き二年の春徳川
及正軍始のゆめ内年也三河必掛り坪の城を攻て廣瀬の
城に向ふる七郎右衛門忠世織田及の部の子津田兵衛助
と討ちふる是より此方大久保一旗常に徳川及に随つて
軍の先を裁すと云ふあり三河必大略随ひ来りせしに永
禄六年の秋の以より不思義の大変也来て中比の外に
踏勘す継令ハ南必佐徳と云ふある上高ちと云ふあり
彼等の信借徳川及に背き来りせ徳川の針傍の寺々小牒
一今せつ徳の世人等距離し吾良我昭と大なるあり

東條の城は福一入て國中の一揆等亦くに蜂起し徳川及
宗徳の人々を右して一向専修の教法此必は以りし事
年久し禱代此家人多くハ彼ちくの檀那より速りに其
宗門を改め彼逆徳は徳一へりさるる此能語文を去て
新より一と修りさるる彼檀那各より合高り合高減す
柳飛生の四忍何れ浅深ハあはれ去りなかり君父現南の
君よりも如来慈悲の大忍ハ未永劫と絶る大なる初さ
らに有るへりすすされハた一人禱代お傳の之忍を殺さ
せりたりく佛法の破滅と擁護せさるんと一いして或
ハ兄弟を引別れ或ハ父子と打連て都合侍八百餘人皆ち
へと為りし此を了りてても大久保一旗親類のちふ
みと殺れ傍寺のうらみを捨て一人も背き来りするその

なく上和田に要害をり多し勝浦守にむうりて日く夜く
日改我ひさハうしかりし年られて昭れハ七年正月十一
日上和田の合我は新八郎忠務眼を射られ忠利ハ子及七郎
右衛門忠世も手負ひそ外一族死す一人も瘡を蒙りしす
と云ふそのあり日廿二月城をさし先親周ゆりし付て
大久保治右衛門忠依よりて罷殺されて山家人より
返さぬんるをむむゆきしあるへしともすへす忠利入
乃常原忠勝に急ぎ柙此友の山家人より首さしせしす
君を恨中り有るまてもはしは只心の愚成るまじに深く
佛法を信するよりてく常原の謀反及逆なんといハそ
科同しかるへくは信守り罷にゆきしあるハハ
右良荒川の人くと始て出敵ことくくたひしけんす確を

めくらんへくは又入るり一族の軍せし振をハ思も出
決してこれゆらめ彼等々勅貴に中加へて八百餘人首は
くへきまてゆと中れハ汝り中不理あり汝りむりらひ
は信守りしと信守りて山家人号悉く返され右良我眼
を始て謀反の張本せし常原ちまらむし失ふなり大久保
切の同廿八年三月長澤の城あり忠世号一宮の要害を
る同廿十二年正月忠世忠依足守号武川の城北ありし
て今川の勢と我ハ文永三年十二月三方ヶ原の合我山方
既に打負て散くし制して引返り忠世山方と始て屏嶽を
おしりて居来る山方をあつめて此年創業紀
り忠世今夜切しきの隙に取討せんと存し人々の手より
足輕の鉄炮をなれたるをあつめて始りしす考異ハ山方はと

を徳川及水威斜めなす人々に傳せて是種の兵をめ
り多に或ハ討れ或ハ落うせて残る不二十人ハはる
忠せりとの志あり今そ百餘人敵の陣にふる屏り岨ハ押
寄せ淡炮おとしくく傳けさるるを打たる武田の陣ハ
今夜夜討ありんとハ思ひもあけは敵軍をハ有りか
まらふも似ぬ多勢也とてあそめめす事大方な
す右指左支入乃伝玄太は勝日今日の合戦は宗徳の兵多
く討せ今夜の夜討いりも叶ふへくは敵軍の軍のや
うあるはるもくくしとて明けハお谷より入今夕武田の
兵は死けの救子人とす甲陽軍鑑もは事を論した
り天正三年四月武田四郎勝頼甲斐守とすりてを以て
徳川三河の必長藤の城はありす徳川及水父子より

老せんとしてうりより織田及又加勢を乞ひる水侵度くに
及ひて後伝長父子殺す勝の兵を將ありありみ原は赤白
ひ流れをあるとして柵を築て陣を築らる此ありみ原と云ハ
南ハ又高山をえりてそる三十町ハはるのうもと勝
はゆり川の川縦横は流れて落合ふる勝頼かきし邊付ぬ
とすて長藤の城の上に南へ考の築と云ふ山に要害を構
へ宗徳の士大約七人をとめてそ力ハ一万五千餘騎を
引率し滝沢川を流つてありみ原は赤白谷川を前とあり
陣をりりて十三不面とありたりる陣のるはり
か二十町ハはる五月二十日の夜河井左衛門尉忠次信
長の軍兵を引寄せ山路を傳りて考ヶ原とありみ原ハ二
十一日の朝よりすの要害を攻るは忠せり牙治左衛門忠

依足と向ひ今日北我ひハ我者ヲ為スハ南の教佐長の加
勢に先を搦させんハ無念の次第あり一我者先先搦て
我ハちやと云忠世いしるも中なる其の哉とて徳川及又
あて初と中は是輕のち銃炮の連発しすうりて足矛に付
られたり馬に乘てハ搦川自互なるまゝとて足矛の手勢
を皆振り立せて是際に進む石川中左衛門平定ウ勢日一
く續めて打て出り足矛先是輕を出し敵は向て銃炮を一
成り放つ武田方にも山縣三右衛門尉昌景子五百人是も
日一く振り立て志ころと傾むけ面もぬるは右敵を打て
曳や声揚て進み来る足矛ウ兵敵搦れハ石川と引て銃炮
を放ちてお散りし一初まりハ我へ返しかめひて切て搦
る小笠原康之科とて一人南子の加しと忠世忠依足矛

と名乗る搦名乗る搦追り返り川九夜こそ攻よりはれ小
笠三科手負ふて引大右衛門昌景銃炮は南引て馬より石川蔵
田反の方より依久右衛門尉佐重六子人徳川左近將
監一益三子人柵より印に打て出り馬場内及かけ立ら
れ敵は又成つて引て入る敵方傍の軍勢只一ならず集て柵
より外におもはれ只を矢は射られやとて三子挺の銃炮
を一面に立返へてを返つる歳田反違うに大久保足矛
ウ軍する振を以てして敵康の手の我ひ初まり方いつ
き隙あり大足へは中々令の標の好標はさしなる浅黄
の幟は馬候付する敵りと是れハ石方と成り石方りと足
れハ初まりはあり初まり石方の堀ひさしなりは誰ウ
ある足て是れと定人の徳川及の石川及地来て初まり

降す初る所に北条左京右大臣上野守を従久人雄形
を并戦信忠より甲斐のふり入て徳川及と戦ふ忠世又
そりろめて志田あ房吉昌幸水方より新治方の戦ひ
氏並の軍悉く利を失ふひ徳川及又中出りし信忠上野を
絶てお換ふより攻められしかりしに徳川及古本府
より隙を飛りて山林より隠れし武田の家士九皆
水取人より互れて後十二月二十一日淡松より攻めし時忠
世を互れ甲斐信忠のみお續せし兵乱人の心未だ
定まらぬ或ハ上杉の志を通し或ハ北条の謀を令せし此
不より守るへしと信忠されたり初め信忠より命ひし時
忠世徳川及に申しるハ彼等の任人依田右衛門尉信蕃云
し以後河内を去りし時水使を絶て水方に在るしるなり

小及へ大及の初湯受来りしとて甲斐のふり攻りき武田
の兵多し中より彼ら忠を致せしは似る志もはりし又忠
世二侯田中の各城をかのみより受取し人ハいさし
不縁より引れて此後二侯の城より退りてはひぬ又紫田七
九弟最盛なり年久しぬれ水取の初承て信蕃と向し信
忠より指し依田より家子希未地集り随ひぬ其人等押寄
押寄攻めせハ彼等を志りぬる水勢を向らりし近もあ
る人々はと云ひしりハ忠世より申せらる信田紫
田信忠より命りて去十一月足利山の城を攻落しきたる
小田井等の城と攻められハ依田より命りし信蕃が所と
信久郡六万石也そ後甲斐駿河の地加へられし十萬石也
大久保の家の中志を記せしを思ふ信田より命りて
大久保の家の中志を記せしを思ふ信田より命りて
大久保の家の中志を記せしを思ふ信田より命りて

色し忠世先陳を奉り今年徳川及関東に福せぬ
りハ忠世小田原北城を治す四万石を領す後日忠世は内閣
の侍記に井伊布多林大久保に關白及より内閣
任身して而の地跡とす上松津に關白及より内閣
白及より而の地跡とす上松津に關白及より内閣
敬人日此例多し是秀吉の業役なり大名の言はれず
へしき也と唯して秀吉の業役なり大名の言はれず
成る一揚一君徳川及の地跡とす上松津に關白及より内閣
うら酒井左衛門尉の地跡とす上松津に關白及より内閣
三年九月卒ぬ嫡子相模守忠隣父に継ぐ忠隣初名ハ忠
と云生年十一歳なり徳川及に迎へ仕へ生年十六徳川の
戦ひに初て敵を打倒し十七歳の時天王山の戦ひに敵陳を
地入て首を斬り此年又味方ヶ原の戦ひに首を斬り十
八歳の時姉川の合戦に先鋒に三方ヶ原の合戦に味方ヶ

敵に戦ひ成り徳川及に隨ひ参る人多りし忠隣も討さ
せかち立す斬りかしもかれ斬りせし徳川及の首を引
返り引返り斬り味方を討つるなり切し愛なり地集て
云かく出来しれとるなり軍ハ後尾後尾山城に土岐
三宅海次左衛門是等二勝ハは徳川及小栗忠政を討て
汝いりもして参りて来れと宣ひしに小栗忠政返り
能るなりて打撃し斬りて追つ参るなり小栗馬助十
市子也かすへきと信見れハ承るとして飛てり忠隣を
たすけ参りし栗此日の戦ひに死すなり血
は内閣に後松天正の初めなり忠隣は徳川及に参り玉替此
を河治す別村上の末流の参りし古文中の三月二十日
と平世書に去月十日に兵戦群衆の足系入りし由哉

たり又佐川友より二月二十日とあるに於て大久保と
をいさるるの由より二月二十日とあるに於て大久保と
天正三年の三月三日とあるに於て大久保と
連署して不徳の事とあるに於て大久保と
年の事とあるに於て大久保と
に佐川友と馬を双へ水子の兵を中知して軍させ森武花
守長一黒母衣一換馬の鼻を双へて山より爰あつたにかけ
落せハ忠隣先より進んで残す敵二騎切て落しる事也
事也より水子の兵の軍する振を足る人々打取する事也
よけ者よけ先忠隣より足取一り陳既に破るとして又池
田紀伊の入り陳より入歩初立の敵降参りて搦向ふ忠
隣も降参りて互に突く敵の降向ふ振より甲の内より突
入し程に忠隣あふのけより馬より敵破てするに打取て
迹のひぬ此時忠隣より此の戦に於ては後より地田

此敵ハ上忠隣より事也此敵ハ上忠隣より之をあたるとして我
りをを案に敵陳悉く破れしりハ忠隣味方の水勢を止め
て水前に集り人々の名不覚記して居り此日忠隣より續
きし弟号下初討捕首十二生捕一人とせし事也天正十
四年十二月四日駿河の武府人水被移する俄の事也ハ
在り年々秀人と其敵移り水一人もなき忠隣斗りて
移る佐川友收せあひ人々も皆感しあ入り創業記より此
山へは由ハ去ぬる天正十二年より被移りしりハ
反と西軍路よりしりハ天正十二年より被移りしりハ
年の十一月の月山移りしりハ天正十二年より被移りしりハ
十一月の月山移りしりハ天正十二年より被移りしりハ
日山移りしりハ天正十二年より被移りしりハ
月佐川友の由依りて上洛し叙爵して後部右補正成り後
相十八年関東より移りあひし時武花の武府生の地を治

ひ一万 文禄二年十二月中納言及之附する日寸四年南園
白秀次水叛逆の由企ありとて太閤の水不慮敵とせぬ
初てハ一定失ハきぬと思召南時中納言及之の部よりま
すをたえりりて 致り事とせ佐川及之を致して終云を
くんと四月三日の晩中納言及之水使立て今朝の朝餉未
らせ何ん事とせぬ人致思より信らる人事をいささ
にまきれてこそ宜ひをいささ忠隣致て心持て水使と對
面して忠隣謹て信承りぬ秀忠未だ幼けりソレも日寸
けて致ぬ水使事進に及りん事悟り少なりとん是水使
をハ返り致て忠隣信を傳へて致て事とすへきとてハ
て水使を返り土井三右利勝を水使立て中納言及之ハ
溜りに伏見の水詰よりれ事とせ 大炊政房 傳と忠隣ハ止

まゝ關白及之の水使及之に及ひて後忠隣又對面してい
く秀忠兼てより云ひ合せる人ありて事の奪せんとして今
朝の曉伏尺に致し忠隣去る事ありたなせ其例の日寸
て致る事よと心持てハひき今こそ初とハ承り返りも
思入ぬとて水使を返り日既に午の時斗りあれハ返りて
致事とせん事も叶り關白及之口惜しするに思ひあひ
り程なく失るりれぬ 大炊政房 傳と忠隣ハ止
西一時に軍籠る中納言及之致す 大炊政房 傳と忠隣ハ止
よりあり小柳康政忠隣父子 子息加賀守忠常此本多正信
佐治守 隨ひ召る志田あ房守昌幸上方より合て信濃上
田の城に楯居る康政忠隣父子合て志田より伊勢傍の要害
を落し八月五日是際の軍勢糧料の爲に敵の地を押し入て

稲を蒔て居る城の兵も少くたゞ今て殺す大高の人
人地加つり水方次第も多勢は成りしりハ敵ハ城より引
入る六日も稲加つんかゞせしめて殺す菱沼忠七弟及研
ハ奥平後ハハ松平橋自陣の勢をも交へ外城一ツ攻破
は有反手傳ハ詳ク也らる此日本多正信敵ハ多勢は恐れてお出する程の事よも
おとしと只お控へ水通りおれと申れハ康政忠隣佐後
ぢり斗らひよとてへうすすと申れハ七日水勢又稲蒔
らんと爰りしと申出ると城中の兵城戸押開て討て出
味方殺すに成て地場多と追追追追討んと忠隣其に救
也右馬允康成り兵口く返り返り城申す是を見て味
方討すも志とて我も我もと討て出り大高の人と先
とて味方の多勢地加り追り返り火出る斗りに殺す

たり殺ハくす引返り遠るをあらせし追討めて大久
保救せり兵二人城の標を飛せり味方討けやけけ城
ハ高ぬと噂りたり大久保り兵ハ松平申す云云
新もあ本多正信水方の人く軍法とすて水巾知るく
人軍する余甚奇怪也といひて水使をせ味方を割
志て引返り同日九日水陣を小徳の城に移り依返り中
言及り申てぬけ城に城攻る軍法は任せて速に誅
せしるへしとて忠隣康成り兵既ハ城を築く上ハ首
を刎へしと下知り救せり嫡子新十郎忠成ハ此由を
すて彼弟を奪りて逐電以又右馬允康成罷蒙る救せり
也忠隣嫡子新十郎忠成も彼城を奪り兵松平を傳詳
失んとは松平守て水方の死していりて志すへきた

我命の惜しきとて思をうしなひ棄て世人ハ辱れにけり
以命ハ義よりして悦しとこれ承れと云ひもあへん月
ら看りて死してぬ世外人多し是より此家人は依りて
を振み又大久保印多し不岐此時又始すなと云り也大
内和松浦の忠死を感し多し其子二人内家人は右に
今の松浦文政りる人かくて正信をりてひまて水勢を
ちけ上田の城をすし日十二日小治の城を以立有る急
てうし世の人其國ヶ東の残ハ既に候りぬ此軍の始終林
己より一此年安永九年の久大坂の西端に乃ち世多し
時此世徒の予を殺せらる又く内方ありしお様と云り
定めらる死くおぬは明れハ安永六年の秋大納言家の
姫君大お松此時加賀西へ入りてせめひし忠隣して送
らせらる七年の五月依行り仙少と稱されし時忠隣正信
常陸西に向て國制を定む忠隣男子七人有り嫡子新十郎

忠常加賀守に任し不承端二万石忠常文福三年元奥平
貞佐守娘にけり大内家の少孫年々其時に時の賢人と云
ひしハお軍家の内是へお入るし安永十六年十月三
十二歳まで世を早ふに二男石川之辰以忠徳一云亦祀日
向守家成り家を継ぐ三男右京進忠務後隆四男之播正忠
長後信五男石川内記竟成是も外祖家成り大坂の
二十四女六男之斗忠尚七男刑部忠村と云或ハ清和門
と云忠隣十一歳まで初て仕へり公の芳養て年六十二歳
及び忽ち罷家少候り者と成りぬ人其家を承りて終令
ハ安永十九年正月五日忠隣小田原其城を立て終りせり
けれ大内家の位を慕りて西洋耶蘇の法禁世人を為し
中りる日き十七日朝入て安永和泉守高虎の家より

史西の系は在る彼寺を焼拂ひ四糸の坊は在りしを八家
とて丹ちて焚焚ぬて水人いふ事と云ふて彼寺の
師二人の資財うち捨て西をさして逃れ日未十九日関東
までハ忠隣り男号を石して本多依後寺正信信を傳ふ杯
去年忠隣り若女を以て山口伊豆寺主信り妻とす兼て支
所承の由懸りも達せし執事の者として始り憲法を犯し
て罪特に輕くし以て史忠隣り者ハ其罪を以ての地は移さ
北井伊兵部少輔並務は預けられ沈ぬ子息右京進日内宿
正二人酒井信後寺忠利を頼人として武藏國川越の城は
石禁らるれりと云ふ大久保累代の切腹すへりし事
り故に故加賀寺忠常り不依をハ其子仙務丸はあふ所也
と云ふへりし此日十一日二あ後對馬寺主信水使を承り

宗徒の人々引續し小田原の城は向て忠隣り後寺退却し
城郭をこぼり中曲輪を止りて日二十四日依後寺正信父
子号忠隣り配流の身書を下し兼てり板倉内膳正重昌
父久しく對面し及ハねハ月の喚あり上洛すと披書し
て忠隣り史進ておしせり去年十二月十四日父伊賀寺務重
に信を傳ふ勝重既にそ部し及ひりハ相摸り旅教は
何向ふが為象教に對し振ふるり勝重と史に請し忠隣
配流の由使たる由史は取ら沈ぬ浪人の男と成て後形る
戦れ者多くし是之す侍あり事終て信承りしとて轉
り事を終て後さしハとて僅て信を承る在りしに此
乃中洛外お強りしに京童田代忠隣り罪影ありと
すてすりやるの出来るとと資財雜具安りしこは持運ひ

以の節に發動に忠隣此由をすて己より夫兵杖こしくく
る末に終つて伊賀守り許に送り家の子弟皆略して國
取を下しけれハ洛中程より轉りぬ二月五日志川内播正
日下部河内守大久保守一節同守今守水劫守を蒙る是ハ
去し十六年三月十七日大内不関東へ下らせあふとてお
模國中系の水猿殺し濁りせあふ時加賀守忠常り病急之
とすて奪ふ小田原城に地行し奪也同三月依地修理左丈
九月あ房後從^埋見二人大に不依没収せしむる忠隣り縁
也忠隣を二月二日近江國に越す南光坊僧正と斃て一
紙の告文を掲ぐ大内不操り返し操り返し水決して危角
仰出さるるもなれば忠隣重ねて又祈るるもあふ新
て死ふる年絶て後執人掃部頭忠常り時より至て或る日對

西の序に罷りて定しく成りありんこり痛しはれと披
きあふへき方あふハ忠常り君にうへて執りしへきま
ゆと進む忠隣すて水芳志の程山うりも高く流うりも深
く但し忠隣罪なりんといひて新り君といふ成りぬた
と人の中披くへき方あふ大内不既に隠れさせあひ今に
至て水ゆるし蒙るるハ大内不すたあやまもせあふハこ
そ苗代ハ水ゆるしあれと世の人の中ゆひあふさもん
よりえハ將軍家の水父のあやまらあふハさせあふあふこ
そゆへ継合少と憐れみあふ水めらみらそ深うりあな
そ水常りといふへき忠隣又已り罷りぬりまんとてさ
も苗代の大祖もて終り水誤なりしハ水事と世に人より
たりハしめ將軍家の水不孝を進めあふせへり更に知さ

よ非すとも身ハ新制り果て侍るも也只此まゝにこそ
ゆへにれと云ひしうハ世を重んじて云おぬへき云繋もな
く感涙よむせひ立出しく忠隣終に配不めてたうろく
るこそ哀れなれ 志願罪翁くするさうに知る人う
すい少に似て 彼に 諺に 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
りて 爰に 謀に 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
収せし 爰に 謀に 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
う娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
少て 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
重んず 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
て 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
第一 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
お換ふ 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
元又 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
案 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按

ゆへにれと云ひしうハ世を重んじて云おぬへき云繋もな
く感涙よむせひ立出しく忠隣終に配不めてたうろく
るこそ哀れなれ 志願罪翁くするさうに知る人う
すい少に似て 彼に 諺に 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
りて 爰に 謀に 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
収せし 爰に 謀に 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
う娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
少て 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
重んず 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
て 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
第一 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
お換ふ 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
元又 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按
案 娘也 山口 〇 交言有る 八年の 甚山口 今ウの 異号の 実記と 按

事ハ推して知るへきものなり○又世に大久保をハ本多
終せしむるに教ひするも子と也今曰く此の罪ハ今も
有るにせしむるに云ふ也西伝に一人いりて有る事加賀守忠
季ハ故加賀守忠常り子相摸守忠隣り孫也八歳なりて父
ニ離れ祖父ノ罪ありし時別の侍者父忠常り遠征を編
みされと八歳也と此時ハ祖父ノ事によりて警居に寛永二
年水ゆりし事ありて初てお仕す三年十二月叙爵し同九年
美濃國加納の城を治めし五万石十六年十一月攝摩水取不
の城に移る七万石交長二年七月四日犯前出津の城に移
る八万石寛文十年四月十九日六十七歳なりて卒し嗣なり
りしうハ右弟亮教隆ノ二男出羽守教博と以て世継と
教博家を継て延寶五年七月二十五日執政の職に補せし
れ加賀守に任し忠朝と改め名乗る又四位の侍從となす

れ日六年五月二十三日下徳の國依倉の城に移る 持統の
嫡子安藝守忠恒二男ハ常刀教房三男ハ守右子教武と
りける

治右衛門左衛門忠佐ハ平右衛門忠負ノ次男なり七弟右衛
門忠世ノ弟也生年十六歳の時紫田修理亮播磨と陸と播
磨に此方一生の事名いふと云教を知りて忠佐十六
歳に年長き時つり加賀守出羽守に治二年正月十七日
の事と又人いふ忠佐長七十九年七月十七日卒すと
云ハ誤れりあや十六十九の文字あやまれり又あや
中おも永禄十一年正月今川の幣と掛川の城の迎りて戦
て敵の侍大迫松丹波守を討天正三年五月長祿の合戦
に足忠世を進め先掛して或田ノ勢打破て或田反の事感
に或田ノ忠世り也長祿の戦ひに水使を承る忠佐なり

りて敵を討つやうて秀吉が信のり已りて中畠と中をを
りし又よりうも四万石子の軍勢を引率して常田の内と
りて殺向は徳川及清洲の城をて此よりをすく右鞭渡を
あてせてもせむひ先忠依をして敵のやうを足せらる
る忠依一騎多勢の中よもせ入りて足輕の兵ともくけ信
くけ信一騎多勢の中よもせ入りて足輕の兵ともくけ信
ふれより徳川及の山懐令のす々にるちくくく人來れハ
一さくくもさくくす敵よなるてあけんる秀吉が信
もその敵のうち十三里の地と引き去るをまつめに信雄
と中ををりてをことなされぬ忠依年ころ鉄炮二十人改
居の才一めて園東くうううひのち上徳必營東の
庄を信^五子園ヶ東の合戦の時中初言及の忠依して

山乃よりこのゆも明れハ孝長六年の長政河の必浪津の城
を^二路ふ^二万日き十九年九月七十七歳まで卒し世継なけ
れハ家も後へ城も除りれぬ^お後忠^勝罪^罰く^し後^ハ忠^依
^と云

石川

長門守源康道と前鎮守府將軍陸奥守義家朝臣の五男た
 海門尉成時の三男成茂下總守義基此嫡子河内守
 義兼の後胤也義兼河内守石川の郡に任じられ石川の
 判友代とすに其子孫終に石川とて名乗るは義兼十七
 代の孫小十郎成茂の時より祖小山下也高朝と名りれ
 改て小山と名乗る朝成は源を中世権政康と云年中
 とす也初て三河守と名りて小川の城に任じつ又石川
 とハ名乗るは親實守の高蓮登と云ふり下也ふり改
 大に親實守の法門徒と名りて此武士一人と撰て佛法擁護の
 を是也小玉の大名ハ下也の任人下也其の加賀と云
 小山と云ふは其の大名ハ下也の任人下也其の加賀と云
 の下也其の大名ハ下也の任人下也其の加賀と云

の城一揆の初と云ふ川も此郡にて三河此時忠律及忠亮の
也幸権当に向りて汝の子一人我よりさせよ我家のおと
かとはくしと任せられ改康明二より收て生年十四歳
に制る二男を奪る忠律及子法より馬帽子忠せ左衛尉
親康しむされしより徳川清康頼光の人とハ成りてより
其子左近右史忠補忠律及より此方三代の君は信其子
安藝守清兼安祥及より徳川及近三代は信人一掃危より
酒井雅系今改親と古に教の事を司する安祥及失させ玉
ひ是傍の賜大納言教伊勢玉よおさせあひし時酒井安部
号と謀りて終に逐く入る水地及の水娘逐くて水の方
と叫つて手あはれ徳川及水誕生ありし時雅系今改親水
竹刀を執れハ清兼水登目の役は侯は是傍及今川治部大

捕及と水よりみ結とれしも清兼を水使より奪されし也
安祥の城攻破つて徳川及を逐く逐くししも清兼を大納
言とて三河の人より逐ひし也駿河の玉府より入らせあひしと
も嫡孫内記水佐よなる伯耆守徳川及水軍始よりしと
て三河の玉梅より坪廣郡等の城を攻らる清兼練め万
せそ是傍の城より川よりされ征るく又駿河國に歸りあひ
義元朝臣とすすに止め給ふせそ中おと瑞し治ハされ
て清兼中おと後中慶孝天也甚右衛尉尉三人より連れ
て駿河の國府より逐ひ今川及より入りて徳川及及逐く
しつと義元ゆきし治つてハ力及びて治りしつと征りて
元討れあひ是傍よりハ治らせあひしつと時多中おと豊後守
清兼男子二人あり嫡男右近徳川及駿河よ海より世治ひし
中おと大龜と大よ思傍の爲

ちたり是義元朝臣の位に依つて也年若くして死に伯耆
ち救ふり是義元朝臣の位に依つて也年若くして死に伯耆
あ川記すや永祿十一年の春の事也一説は酒井忠次と
と名乗せし所の伯耆守康昌と志す也右記とすや世
救正と云ひしり上の方多て出雲守と改し時名と改め
云二男日向守家成是長門守康通の父也
家成わがりしり徳川及は仕へ水軍初の日より大高
警津丸根等の戦を始めとて後かこの軍に従ひ高
せはと云事なく言名又救を知り一向専修の門徒号
有き事少せし時家成一人味方首て水使を取り戸呂の
要害より向ひ所救を降参させ申中恙く平らく今川上
徳久氏高弟男の武田に也後去後河の所府を崩されてを
西掛川の城に楯籠る徳川及と戦ひ又此城をもく人

し家成并に酒井雅重及政親より手く降を乞ふ事あるを
すけ海へお換ふへ高少人ハ家成形て此城をせむり
り永祿十一年の春の事也一説は酒井忠次と
ハ伯耆守と云はる所の元龜元年の秋家成酒井高
つ尉忠次と大將を取り部合其勢二子人藏田及を介以人
とて迫りおは殺向し依る木瀬禎入及り多勢と一日うそ
馬蹴りる二十餘ヶ交鋒に敵を退却し爰より追年武田は但
せしを江の小人号三方ヶ原の合戦の後布國より向り爰
りこよ要害を構へて楯籠るの端をさし
と云す家成是等と人して天正元年二月の二十五日久
能三弟高弟の宗徳と先可久煇の城に押寄て忽ち攻め
残る城とこく人してせむる迄もなく崩失ぬ日六月二

侯の城を攻落し九月武田四郎勝頼を江戸に殺す
の城をとり及ぶに此城中よりやすくハ落されしと之
けれハ攻る及て引て歸る此時家成二人をして日板
新て勝頼を斬りと謀るに揚兵隊を信高天神の城落し時
家成より男長門守康通首十六を執る武田城一年の秋康通
大久保七郎右衛門忠世と曰しく甲斐信忠打送りて天正
の十二年信雄江を援けむ羽柴と軍起りし時日向守家
成掛川の城に止まり長門守康通ハ小牧の陣に送りた
り長湫の合戦は上方の軍既に利を失ひ秀吉の多勢樂田
を斬りて長湫は向いて地味方多平八郎忠勝戦ひ死な
らん味方は荒子の多勢と軍せんり是れ未だ地加りりて
水先を掛んとて小牧を出り長門守康通も曰しく後ひて

馬をとらせ小幡の陣に地味方多平八郎忠勝と引返りあひけ
れハ戦ひ及ぶに山中忠吉南河内守也世の人多
小田原を攻られし康通先陣より送りける此後ハ家成
既に先ぬれハ康通常に軍より送りける此後ハ家成
は移りあひし時家成伊豆守梅縄の城を落しけるハ
上野守徳政の城を地味方康通に送りけるハ
八年家成と嫡子康通よりゆつりし利をハ家成ハ別
と日向守と後ハ家成より送りけるハ家成ハ別
りしと関ヶ原の戦ひハ家成江戸に止まれハ康通上方に
馳向ひ松平玄蕃元家清と尾純の清洲の城をとりぬれハ
家成六年の二月家成英徳守大柿の城を落し五万城をハ
大名に謀り修せられし日守十一年七月二十七日康通
五十四也とて父は先立子息あやむと漢九歳をれハ家成

又その事を以て同十四年十月二十九日七十六歳とて
卒し其の久保お換と忠隣と二男之辰辰忠徳と家成と
亦孫成れハとして其の事を継せられ康通の幼息を八関東と
百下され之辰辰忠徳十五歳より百下て十九歳とて小
山関ヶ原の陣に隨ひ私ニ云桃洞隆平曰忠綱廣長之時
十五歳於台徳公御前元服賜諱
字後百改改徳輔又
改教総後復忠総 去八年又叙爵し亦祖家成卒し其
跡を継ぎ大柿の城を領す其の年十九年の喜忠徳と
実父お換と忠隣最幼少し其の依りて忠徳も其の跡を
其の依りて今年の大坂の兵起りし其の忠徳忠徳も其の地
向ひ博考ヶ原を攻めりて去依る乱起入福清の堤をも
亦破り松陽の地を打入し其の戦切並ひるし其の
其の依りて其の幼弟を以て其の依りて其の軍記し其の

手に系指 向ひ戦て首三十を切て其の後豊後國日田此
地に編され元和三年 寛永十年十二月九日下徳の國依念
北城を以て一六万石を以て 同十二年従四位の下に
叙し其年追に忠徳亦の城を編す七万 慶安三年十二月二
十四日又卒す嫡子陣正少弼勝康又は先達て今年七月八
日又卒し其の嫡孫忠十郎を嗣とし五万 次男播磨守總
長一萬三男上中阿波守正當七子 四男市正正徳三子 五不
辰多川守正忠十郎祖又は其の依りて其の依りて其の依りて
日伊勢守忠山の城を編す五万 承應元年十二月二十八日
叙爵し其の依りて其の依りて其の依りて其の依りて其の依りて
淀の城を編す一六万石を以て 其の依りて其の依りて其の依りて
播磨守孫總長一萬石を以て其の依りて其の依りて其の依りて

小一万是より先寛永十八年六月二十日水扈後組の書状
と成され此組の書状慶安元年三月大島北段より移り又う
送付を分ちて後伊勢守神戸の城を賜ふ治三年十一月
二十二日大坂の城高と成る河内國石川郡と加へ賜ひぬ
一万石加へられ二万石と成る元禄四年九月に徳川の大島
に蔵入され寛文元年十月二十二日仍年五十七歳大坂より
其子若狭守徳良父の家を継ぐ

